原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百五十号

原告団レポート

CO患者――西田正一さん

前途に広がる黒い影

煙のなかを、からくも逃がれ出たものの……

とりついた奇妙な発作

坑外特務工

CO患者といっても、西田正一さんはあの三池大爆発に被災した患者ではなく、大爆発から四年後の――昭和四十二年九月二十八日同じ三川鉱で起きた、坑内火災に被災したCO患者のなかの一人である。

坑内火災は、会社（三井鉱山）の保安怠慢がひき起こした自然発火が原因だったことは、裁判などですでに明らかにされている。

さて西田さんは、被災以後労災補償を受けながら病院に通院、治療を続けるかたわら、一日も早くもとの体にもどろうと機能回復をめざし、リハビリテーションをくり返してきた。

ところが昭和四十八年に、「症状が固定したから……」という口実で、政府から頼む労災補償を打ち切られ、その後はいや応なしに〝坑外特務工〟という職名を押しつけられ、もっぱら万田機能回復訓練所（長くリハビリを続けてきたところ）周辺の除草作業など、ごく軽い仕事に従ってきた。

烙印は、障害等級十二級。わずか十六万円ほどの、手切れ金とのひきかえだった。

住まいは、荒尾市西原町二丁目五―一六の鉱員社宅二十一棟。ここから毎日単車で職場まで通勤しているが、思えば、被災前の彼はといえば、三川鉱の、甲方開発仕繰工として自慢の働き手だった。それが今は、精いっぱいやれる仕事が草むしり。かっての面影はなく、心身に刻印された傷痕は深い。

父母の他界

彼は、昭和七年の二月一日に生まれ、小学校に通う子どものころを大牟田の船津町で過ごした。きょうだいといえば、姉二人。父親を徳平さんといい、採炭工として四山鉱の坑内で働いていたが、昭和十三年、日支事変に駆り出され、まだ三十四歳という若さで戦野に散った。彼が六歳のときのことだったのである。

三十三歳という若さで、つれあいに死別した母親ミサオさんは、終始息子の西田さんのもとで暮らしてきたが、昨年の十月のこと現住所で他界。行年七十三歳だった。よしで、思わぬ被災からCO患者になってしまった不幸な息子のうえに、親として大きく心を痛めながら息をひきとっていったという。

惚れた女房

彼は昭和二十一年の四月、国民学校の高等科を卒業すると同時に三井鉱山が経営していた鉱山学校に入学する。第一回生だったとかで、建築科に在学。

二十四年の春、鉱山学校卒業。そして四山建設へ。すでに敷かれていた道を、彼は歩き始める。

一年後柿園建設へ。鍛冶工（溶接）として、めきめき腕前をあげていった。

その間、住まいを船津町の家から、渡瀬（三池郡高田町）の岩津社宅に移す。

二十七年五月十三日、結婚。船津町に住んでいたころから、同じ町内に住んでいた幼なじみのアイ子さんを妻に迎える。

アイ子さんは、昭和六年九月十八日生まれ。とすれば、そのとき夫となった彼が十九歳、妻となったアイ子さんが二十歳（といっても五カ月だけ早い生れ）。一対の雛人形を思わせるが、たずねたとき「ほれ合った末夫婦になったのでしょう」と問うのに、アイ子さんが「ホ、ホ、ホ」とニッコリ笑ってこたえた。

闘うなかで

現在所へ住まいを移したのは、三池大爆発の翌――昭和三十九年のこと。その間に、西田さん夫婦は一男二女を恵まれる。

二十八年一月十五日、まず長男誕生。正博さんと呼ばれ、今年二十六歳。調理士として身を立てている。

長女の由美子さん。働くために大阪へ。某百貨店に勤務中。三十年十二月十一日生まれだから、今年二十四歳。

次女で末っ子の洋子さんは、大爆発の年の三十八年七月十九日生まれ。十六歳で高校一年生。

三池闘争のとき、末っ子の洋子さんこそまだ生まれていなかったものの、長男の正博さんが七つで、長女の由美子さんが五つだったから、ほかの例に見るようにこの一家もまた異常な困難とまず闘わなければならなかった。

そのころは、前記したように渡瀬の岩津社宅に住んでいたが、家の大黒柱の西田さんは行動隊員の一人として、あのヤッケに身を固めながら、日夜渡瀬地域分会を、資本の分裂工作の手から防衛するために骨身を砕いていた。

それに、ストライキを続けているホッパーに危険が迫っていることを告げる、あの打ちあげ花火が揚がるやいなや、こんどは自転車を駆ってホッパーのもとへ駈けつけることもしばしばで、夜も、彼が家に帰って寝ることは稀れだったのである。

妻のアイ子さんは、そんな闘いのなかで、「家庭から、組合の団結をこわすようなことがあってなるものか」と、これまた歯を食いしばりながら、一万円生活に耐えて闘った。ときには、三池主婦会のハチマキをきりりとしめ、二人の幼な子の手をひっぱりながら、主婦仲間とともに激しいデモをくりひろげた。

こうして、二人を結びつけた夫婦の絆はますます固まり、一家はいよいよ労働者家族としての成長を遂げていく。

突然煙が…

昭和三十八年十一月九日のあの三池大爆発のときのこと、常々満勤満勤で働き続けてきていながら、その日に限り仕事を休んで命拾いしたものの、それから四年後、同じ三川鉱で起きた坑内火災では、彼はついに逃がれることができず、被災してしまったのである。

坑内火災は、その日（前述）の午前五時三十分ごろ、同鉱の坑底のゼロ片材料線坑道で起きた。

彼は開発仕繰工として、前夜からの三番勤務をすでに終り、人車乗り場で仲間とともに、迎えの人車を待っていた。

そのうち坑道の向こうの方から、坑道をちょうどはうようにして、白い煙が流れてきた。そして煙は見る見るうちに濃さを増してきた。

だれの頭のなかにも、大爆発のときの恐るべき記憶がよみ返ってきた。「これは、エヤー管の破裂としてはおかしか。ひょっとしてまた爆発では……」、だれかが声をあげた。

「よし、見てくる」、といい棄てて、坑道のうえの方に消えていった一係員が、すぐひっ返してきたかと思うと叫んだ――「金賞退避」。

だれからともなく、坑道を風上の方向へ歩き出した。そのまま、迎えの人車をのんびりと待っている気などしなかったのである。事実またゼロ片材料線坑道近くまでやってくると、それまでは白かった煙が急に真っ黒に変わったばかりでなく、そのうえ天井から墨のような煙がむくむくと噴き出しているところを見た。

もう、無我夢中だった。キャップランプを坑内帽から取りはずし、足もとの人車のレールを照らしながら、みんなはうように歩き続けた。

脱出したが

そんな煙のなか、鼻さきをライトのかすかな光で照らしながら、坑道のうえの方から人車が降りてきた。それにキャップランプで合図をおくり、これから奥の方にはもう一寸もすすめないことを告げ、とりあえず坑口の方へひき返すことにしてもらった。さいわい西田さんは、その人車に便乗、三川鉱の坑口から仲間とともに脱出することができたのだった。だが、そのときすでに彼は、坑内火災と同時に発生した一酸化炭素の侵襲を受け、も早や取り返しのつかぬ体になってしまっていた。

奇妙な症状

「気が短くなった」「忘れっぽい」「腰痛」などなど、CO患者に共通する症状をあげれば際限がないが、彼にはまた得体の知れない発作がつきまとっている。

いつの夜だったか、妻のアイ子さんに末っ子の洋子さんと三人で、夕べの食卓を囲んでいたときのことである。

「そうお酒もはいっていなかったのに」（とアイ子さん）、彼がふと「俺はどうかなった」といいながら箸を置いた。

見れば、そのときもう彼の顔のいろはまっ青だった。そして、けんめいに腹をおさえながら、「腹が痛い」と苦しみ始めたのである。

そのうち、彼の意識はもうろうとなっていった。

あわててアイ子さんが、隣り（といっても三～四メートルしか離れていない）の間に床をとってやったものの、体は完全に自由を失ってしまっていて、ついそこまではっていく力もなかった。

あまりにも突然の夫のこの変わりように、今やすっかり腰を抜かしてしまったアイ子さん、気を取り直し、「早く医者を呼ばなければ……」、と受話器を取ろうとした。と、これはいったいどうしたというのだろう、彼の様子はそのときがらりもとへもどり、いままでのことがまるでうそだったように、けろっとした表情をしているのだった。

奇妙な発作を起こしたのだが、これはまぎれもなく今年の七月の某日起きたことである。聞けば、こんなことがすでに数回も起きているのだが……。

広がる不安

彼は、七～八羽のインコを家で養っている。といっても、餌やりから水の取り替え、さては鳥籠の掃除など、世話のほとんどは妻のアイ子さんの仕事なのである。

「この人は、ただ眺めてよろこんでいるばかりです」、とアイ子さんは笑う。「気が向けばやらんこともないが……」、と彼は頭をかくのだが、頭をかくところを見ると、果たしてどこまで彼の言を当てにできることか。

炭鉱――、特に坑内労働者は満十五年間の坑内労働経験さえあれば、定年と同時に五十五歳から、たとえ不満足なものであっても、頼む厚生年金を受給できる。ところが、坑内労働経験の浅い彼は、一般の場合と同様、満六十歳からでないと、悲しいことにそれがもらえないのである。

厚生年金の受給資格が国から与えられる六十歳までを、どう食いつなぐかということは、一般の者でさえ心をよじる問題なのに。

四十七歳といえば、定年まではまだ間があるのだが、明日の暮らしを覆っている不安の黒い影は、早くも彼の心をしめつけている。

「小鳥たちが動くのをながめていると、不思議に気持がやすらぎます……」と、西田さんは語る。とくに日曜日など、鳥籠の前でよく過ごす。